EATER THE WORLD SHINE a PERSONS - 世界を照らす者たち -

本間マグロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R T H E W O R L D S H I N E a P
E R S O N S . 世界を照らす者たち .

【Nコード】

N7258Z

【作者名】

本間マグロ

【あらすじ】

「ゴッドイーター」その名は神を喰らう者この物語はそんな「ゴッドイーター」になった少年少女たちの切なくも愛のある物語である。。。。

これが初めての小説になります。頑張って書いていきますので応援よろしく願います。

G O D E A T E R 設定（前書き）

神なき世界にだからこそ人間は神を求めてしまう……。

そんな神なき世界を命がけで生きてきた少年少女の話である。

世界が神を失うときこの物語は始まる……。

G O D E A T E R 設定

・アナグラ

居住区、食料生産区、工場区などを含んだアメリカ支部の施設全体を指すスラング。

支部拠点施設が地下に張り巡らされている事からこう呼ばれている。

・アラガミ

「神」の名を冠する人類の天敵。2050年代に突如として発生した「オラクル細胞」が地球上のありとあらゆる対象を「捕喰」しながら急激な進化を遂げ、多様な生物体として分化した。

通常兵器の全く通じないこの強大な力を前に、いつしか人々は極東地方に伝わる八百万の神々になぞられて「アラガミ」と呼ばれるようになった。

アラガミの出現により、大部分の都市文明は短期間のうちに崩壊してしまった。

・ゴッドイーター

フェンリルに所属し、神機を操りアラガミと戦う者のこと、通称「神機使い」。

神機を操るために「オラクル細胞」を自らに移植している。常に命の危険がある仕事だが、一方で生活水準は極めて高い。家族も含め生活面において優遇されるためゴッドイーターに憧れる者も少なくない。

規定年数の兵役を終えるか、士官としての能力を認められれば引退することができるが、多くのゴッドイーターはそれまでに命を落とす事になる。

特にアメリカ支部のゴッドイーターは広大な大地で数多くのアラガミと戦うため100人以上いる。

・神機

アラガミに唯一対抗できる兵器。その正体は「アーティフィシャルCNS」と呼ばれる人為的に調整された「コア」を有するアラガミそのもの。

ゴッドイーターは体内に投与された「P53 偏食因子」を媒介とし、「腕輪」を通じて神機を操る。神機を操作するためには「オラクル細胞」を人体に深く埋め込んで神経と接続する必要がある、本人の遺伝的体質が該当神機に対して「適合」している事が必須条件となる。・フェンリル

「人類の保護と科学技術の復興」を掲げて活動する団体であり、事実上の世界の盟主でもある。神機をはじめとしたオラクル技術を所持しており、実質的に人間社会を掌握している。

元々は生物工学、生物化学に特化した穀物メジャー資本の一企業に過ぎなかったが、アラガミの発生以後オラクル技術によって台頭した。

旧北欧地域に本部を構え、全世界に支部を持つ。

・フェンリルアメリカ支部

かつて「アメリカ合衆国」と呼ばれていた地域に所在するフェンリルの直轄支部。物語の中心であり主人公が所属している支部である、支部長はアレイン・A・サンダース。

人類最後の希望の担い手として、人材面、資材面のいずれにおいても特別優遇措置を受けている。

超強力なアラガミの頻出地帯として有名であるにも関わらず、

アメリカ支部に身を寄せる人々の数は年々増加している。
広大な大地が広がっているためゴットイーターは専用の起動要塞
で目的地に移動する事もある。

・バレル

フエンリルアメリカ支部に使われてる、ゴットイーターのミッシ
ョン移動のための起動要塞である。

大きさは縦 100m の横 200m で作られている。

要塞の設備はとても充実していてとても快適である。

このため楽観的にゴットイーターになる人間が増えてしまっている
のも確かである。そのため年間のゴットイーター死亡人数は20人
を越すこともある。これにより多くの支部から批判を受けることが
あるが方法がないため使っている。

大概はヘリなどで現場に向かう。

G O D E A T E R 設定（後書き）

今回は場所やそのほかの設定を書きました。

少しずつですが書き進めていきますので感想や反省点などをよろしくお願いします。（土下座・・・してますよ???)

ミッション００ プロローグ（前書き）

神なき世界にだからこそ人間は神を求めてしまう・・・。

そんな神なき世界を命がけで生きてきた少年少女の話である。

世界が神を失うときこの物語は始まる・・・。

ミッションのプロローグ

この世界……神などいない

私の知っている神は、全てを奪い、全てを喰らい、蹂躪するその存在は……人間達にとって、敵であり……畏怖する神のような存在だということ……。

私は知っている。このクソな職場がどれだけ人間を殺しているか……。

私は知っている。目の前に現れた敵の名前を……。

私は知っている。大切な家族を私の目の前で殺した敵を……。

私は今でもその敵の名前を聞くだけで体が砕け散ってしまいそうになる……。

その名前は……荒神アラガミ

だから私は「ゴッドイーター」になった、あの過去を払拭する為に……。

だから私は「ゴッドイーター」になった家族の仇を討つ為に……。

……アラガミに対抗する為に生み出された「神を喰らいし者」

この物語は神なき世界を駆け抜けてきた人間たちの飽くなき戦いの記録。

そして　　愛と絆の生む儂き物語である……。

ミッション○○プロローグ（後書き）

これから本編を書いていきますので楽しみにしてください。

ミッション1 適性検査(前書き)

神なき世界にだからこそ人間は神を求めてしまう……。

そんな神なき世界を命がけで生きてきた少年少女の話である。

世界が神を失うときこの物語は始まる……。

ミッション1 適性検査

アメリカ支部特別競技場（第一適性検査場）

「こんにちは諸君！！」

凜々しくもありかつ存在感と威厳のある声がマイクから伝わり競技場に響き渡る。

目の前には白髪、眼鏡、白衣を着た男が立っていた。

「…………… たぶん60代くらいで身長は175?くらいだと思います。全体的に痩せている感じである。」

「いきなり呼びつけてしまいすまなかつたね。」

私の名前はアレックスⅡAⅡサンダース。

アメリカ支部の支部長だこれからは君たちの上司として指揮をとらしてもらおう人間だ。

いきなりですまないが本題に入らせてもらおう。

まずは、君たちが幾多の試験を乗り越えて、ここまで来たことに私は感謝している。

君たち8人には最後の試練としてこれから適合試験を受けてもらう……………。

これに当たり君たちの目の前に扉が見えるだろう。

それは神機の適合試験のために作られた部屋になる。

君たちは名前を呼ばれる。

そのあとドアに向かいたまえ…その中に入ればすぐに適合試験が行おなわれる。

君たちが、この試験をクリアすることができれば晴れて「ゴッドイーター」として多くの

戦場でアラガミと戦ってもらおうことになるであろう。

それでは健闘を祈るよ。」

言い終わると即座に観戦ルームから出おうとしたとき踵をかえし「ちらに戻って来た。」

「おおおつとすまない。

言い忘れていたよ……………遅ればせながら君たちに言わせてもらう。

試験合格おめでとう。以上だ。それでは、あとは任せるよ。

ウエルソン君……………」

言い終わると即座に踵をかえし観戦ルームからドアの向こうに消えていった。

「それでは、これから適性検査を行う。今回適性試験の適性検査を行なう。

ウエルソン＝マイリーだ。

では、呼ばれた者から前のドアに迎え。それでは○○……………」

私は、眠気を堪えていたのだがさすがに我慢できず、フア〜と欠伸が出てしまう。

今朝は7:30に起床したことで早起きの嫌いな私にとってはとても不機嫌この上ないことなのだ。

だがなぜそんなに早起きをしてしまったのかと言つと今日の試験に緊張してしまい寝ることができなかつたのである。

自業自得なのだが、なんかとてもイライラしてしまっていた。

後ろからチヨイチヨイ小突かれる。

ひゃん!!と変な声を上げてしまった。

自問自答をしている時だったので思わず飛び上がってしまった。

すかさずギロリつと後ろを見るとほんわかボブカットの少女が立っていた。

髪色は茶色、目がクリツとしていて整った顔立ちにミニスカートにゴスロリみたいな上着を着ている　小柄なのだがそれに似合わない豊満な胸が見えている。

「ねえねえ君なんて名前??私の名前はフレディーナ!!ワグナーよ
（笑）」

キラキラスマイルで私に向かって朗らかに話を振ってくるデカチチちゃん。

私はポカーン、としてしまった。

何かに突かれたように脳内が再起動する。

「え、ええ……………私の名前……………リリース……………リリース!!プレーナ」

「リリスちゃん……じゃあ……あなたのあだ名は……」
いきなり馴れ馴れしく私のあだ名を考えてるデカチチちゃん。

私は訝しげにデカチチちゃんことフレディーナ「ワグナー」の顔を眺めていた。

何か閃いたのか、頭の上に電球マークが浮かび上がる。

「リリ……リリっち……リリっちでどお……」

キラキラスマイルで聞いてくるチチディーナことフレディーナ「ワグナー」。

私はその笑顔にビビッてしまい。

「良いんじゃないの……」

と引き気味に相槌を打ってしまう。

私は心の中では、

（やっぱり苦手なんだよね。こんな積極的な子）
と思う私である。

そんな他愛もない事を行っているうちに自分の番が来てしまう。

「次は……リリス「プレーアナ」の番だ……」

「あ……はい……」

いきなり大きな声が聞こえた、ため反応に遅れてしまいそうになる。

「どうしたのかね？適性試験を受けるに当たり少し緊張しているよ
うだね。」

あまり緊張しないほうが良いよ。
そのほうが良い結果がついてくる。」

特別競技場に響き渡る、優しい声とても暖かく包容感のある声で私
を宥めてくれる。

後ろからチチディーナことフレディーナが「頑張ってるね」とキラキ
ラスマイルで言ってくる。

ほんと緊張感のない顔だなと思ってしまう。

「うん、頑張ってくるね。」

とフレディーナ自分なりのスマイルで返す。

そのまま私は前方にある扉を目指して歩き出す。

フウ〜と息を吐き扉を開けると……………

”パパーン”とクラツカーの音がする。

ひゃう、と変な声を出してしまった。

驚いて周りをキョロキョロ見渡す。

「いらっしやい！！クロト＝ワグナーの研究所へようこそ！！
君が”リリス＝プレーナ”ちゃんだね！！！」

にこやかな声が扉を開けた向こうから聞こえる。

私は訝しげに中に入ると目の前の椅子が回りクラッカーを片手に握りこちらに微笑んでいる

30代くらいの男が現れる。髪を後ろで少し結んでいる。

髪は茶色、目が細く少し細身の体をしている目元にはクマを作っている。

服装はヨレヨレの白衣にYシャツに黒色のズボンを穿いている。

「いやはや……………へへ君がリリす」プレーナちゃんね」

「どうかしましたか??」

驚いているクロト博士に疑問を懐く

ニコリとこちらに笑いかける。

「いやへ今回のゴッドイーターの8人の中で群を抜いて戦闘力が高いと聞いたからね。

想像以上に細くて小さい子だから少し驚いているだけさ

」

こんなことを言われてしまった。まあたぶんクロト博士はガチムチの筋肉お姉さんでも想像していたので在ろう。

私だって時々自分が人間の領域を超してまっている、ような動きをよくする。

例えば……………普通の人が数時間掛かる山道をモノの見事に20分弱で登りきつたり

20mから逆さから落ちたのに無傷とか垂直跳びが10m超すとか・
・まだまだたくさんあるけど

まあ一言で化け物みたいな身体能力と体の頑丈さを持っていると自分でも自負してしまう。

「まあ……………それは追いといいきなりだが適性試験を行わせてもらおうよ。」

「はあ……………」

曖昧な返事をする私にクロト博士が近づいてくる。

私の肩をつかみ言う。

「あまり緊張しなくていい、そんなに難しいことではない君の右手にゴットイーターとしての称号ある。」腕輪”を付けてもらおうだけさ」

「わかりました。」

と答える。

「じゃあこちらに来た前。」

と後に付いてくと部屋の奥に扉がある。

そのドアを潜り長い通路に出るズンズン進んでいくと広い部屋が現れる。

横10m 縦10mのバカデカイ空間が広がる。

その真ん中にポツンと神機がはめ込まれたプレス機がある。

クロト博士は私の背中をポンと押す。

「ここが君の人生を変える部屋。ゴツドルームだ!!」

胡散臭い名前を付けていることには触れないでおこう。

だが目の前には神を喰うための武器。神機がすぐそこに在る。

ゴクリと生唾を飲んでしまう。

「さあ行きたまえ。ゴツドイーターとしての第一歩を踏み出す時さ」

と言いどこかに行ってしまった。私は。神器を食い入るような目で見ていたので気づくのに遅れてしまった。

「リリース君さあ入りたまえ」

声のする方向を辿ると3mくらい先にガラスで覆われた部屋が見える。

そこに先ほどまで私の横にいたクロト博士が立っていた。

私は言われるがまま神機の挟まれているプレス機に付かずいて行く。
そのままプレス機の前まで歩み寄る。

私はそのまま神機を掴もうと手を伸ばそうとした時

「ストップ!!」

スピーカーから大きな声でクロト博士が止める。

我に返ったかのように目をパチクリさせてクロト博士を眺める。

「いきなり止めてすまないね。だがここ君に忠告せねばならないことがある。」

いきなり真剣な声になり背筋が伸びるのが自分の体から感じられた。

「君は死ぬ覚悟ができているか？君は神に逆らい抗い殺すことができるか？」

君の目の前で仲間が死んでも前を向いて戦うことができるか？

君は自分が化け物になることを受け入れることができるか？

君は「ゴッドイーター」になることができるか？

君は今から神を喰らう者になることができるか？

「ゴッドイーター」になる覚悟が有るならそこにある剣ツルギを掴むがい
い覚悟がなければ

即刻ここから立ち去れ!!これは最後の審判だ!!」

「さあ君はどうする」リリース＝プレーナ」

圧倒的な威圧感・・・自分が押し潰されそうにもなる感覚胃から何か逆流してくるような感覚に陥る

私はそれでも唇を開き真っ直ぐな眼差しで答える。

「私は「ゴッドイーター」神を喰らい神に抗う者……でも私は仲間が死にそうになったら必ず助けます。

死ぬ覚悟もありません！！私は生きる！！生きてこの世界を変えます。アラガミの居なかった。あの世界に私は変えて見せます！！」

私は言い終えてからすぐにプレス機の中に手を突っ込み神機を握る。

プレス機が私の手を挟み込む。神機からそしてはめ込まれた腕輪から何かが流れ込んでくる。

体の中を何か細いものが蠢いているかのような感覚とても気持ち悪い……吐きそうにもなる。

それでも耐えたここで負けては生らないそう感じた……意識が朦朧としながら5分が過ぎた。

プシュー、と音を立てプレス機が私の腕から離れてゆく……。

目の前にはクロト博士がいる。

「よく耐えたねこれからは君が「ゴッドイーター」として良い戦果を果たせるよう願っているよ。

素晴らしい決意だったよ。」

意識が朦朧とする中間こえた言葉。

「あり……が……とう……い……ま……?……」

言い終える前に果たしの意識が視界が黒く塗りつぶされていった。

ただ頭の中では

” お父さん、お母さん、お兄ちゃん、レナ、私ハゴツ
ドイーターに生れたよ。

これからが新しいスタートだから見ていね。”
と夢の中で家族に向けて飛びっきりの笑顔で話していた夢を見た。

続く

ミッション1 適性検査（後書き）

みなさんこんにちは本間マグロです。

今回は初めての小説だったのでたくさん間違っていると頃があると思います
ますが

この小説を読んでいただきありがとうございます。

今回の小説は思いつきで書いてしまっていますので感想・反省点・
改善点を募集しております。

最近になって彼女の大切さを知りました。

あゝ彼女ほしいな・・・すいません愚痴りました。

せあ次のミッションは初陣です。

ここからたくさんキャラクターを出していきますので楽しみにして
ください。

しかもまさかのアンナアラガミと戦います。

次回を楽しみにしててくださいね。

それでは読者の皆様この小説を読んでいただき誠にありがとうございます
います。

これからはエンジン全開とはいきませんが書き進めていきますので
どうか応援よろしく願います。

キャラクター名・キャラクター設定募集中です。

まだ主人公のキャラ設定ができていませんがいつか載せます。

ミッション2 ～初陣～（前書き）

神なき世界にだからこそ人間は神を求めてしまう……。

そんな神なき世界を命がけで生きてきた少年少女の話である。

世界が神を失うときこの物語は始まる……。

ねえ……………誰か助けてよ……………お願いだから助けてよ……………私の家族を助けてよ……………グチャ……………バキツ……………やめよ……………

お願いだからやめてよ……………私の大切な……………お父さん……………お母さん……………お兄ちゃん……………レナ……………を食べないでよ……………

お願いやめてお願いだから食べないでよ……………私の大切な人を食べないでよ……………も……………もうやめてよ!!!!!!

「もういや

!!!!」

自分の声でリリース＝プレーナはガバツとふかふかのマットから跳ね起きた。

今現在は、ヘリの中にいる。なぜヘリの中なのかというと、ゴッドイーターとして初めてのミッションに

向かって居るからである。

はあはあと荒い息をしながら、大きく目を開ける。

外は明るい朝日が顔を照らして込んで、私に光が当たる。

悪夢と太陽の光で背中が汗でびっしょり濡れていて、服が張りついていた。

私は夢を見ていたらしいそれもとてつもなく嫌な夢を見ていた事が分かる。

私は恐る恐る額に手を乗せると酷く汗で濡れていた。

あまりにも恐ろしくて今にも胃から何か出て着そうにもなる。

思い出すだけでも不愉快な気持ちになる。 過去の光景がフラッシュバックする。

嫌な気持ちになり思い切り壁を拳を叩きつける。フツと我に振り返り尋常じゃない汗を掻いたのが分かり……………。

回りを見るとフレディーナたちが驚いて此方を見てくる。

「スイマセン……………」。

自分の顔が赤く火照ってくる事が分かる。

スツとタオルが目の前に現れる。

「どうした??初めてのミッションに緊張しているのか??」

優しい声で私の混乱していたのが冷静さを取り戻す。

オレンジ色の髪、スツと通った鼻筋、凛々しい顔立ちに体格のいいオレンジ色服を着た。

男がこちらを心配そうに眺めてくる。

彼の名前は アイル「イエーガー」。

新型神機を一年以上使いこなしている。いわば、ベテランの新型神

機使いである。

神機は 虎剣 大王 真ノ強支援シールドノヤタガラス 改

ベテランだけあつて武器もすごい！！

ほかにも新型の神機使いがいるが、イギリス支部に今現在派遣されている。

名前は知らないがかなり有名ならしい・・・。

横にもう一人男が座っている。

名前は

とっがみ
討神 カズト

アメリカ支部に居る数少ないアジア人である。極東支部より配属されてきた。

黒髪に整った顔立ち、黒い瞳、青色と灰色が主体の服を着ている。

神機は 肉斬りクレイモアノ龍大甲ノ20型ガット

カズトは神機を抱えてポツと空を眺めている。

そんなをカズキを眺めているといきなり視界が茶色に染まる。

「大丈夫ですか??リリっち」

小柄で茶髪のボブヘアの胸が特徴的なチチディーナことフレディ
ーナワグナーが心配そうにこちらを眺めてくる。

「どうしてんですか??悪い夢でも見たんですか??とてもリリッ
ちの元気がないですよ??」

と私のほうが身長が高い為、大きな瞳が上目使いでこちらを眺めて
くる。体からは甘いピーチの匂いが鼻をくすぐる。

その横には、ブラスト系神機　ビュール砲を携えている。

彼女は旧型神機の使いであり、クロト博士の娘でもある。

それでもフレディーナは武器を持っていても笑顔を絶やさずこちら
を見てくる。

だが笑顔の中に心配そうな目でこちらを見てくる感じがした為、本
能的に

「そんな事ないわよ。」

と少し引きつった笑顔で答え、私は、フレディーナの頭を優しく撫
でる。

嬉しそうにフレディーナは目を細めて笑う。

猫みたいに私にじゃれつくフレディーナをみて自然に笑顔になる。

自分がどれだけ悪夢恐怖と初ミッションでの緊張、恐怖があったの
か、はじめて知る。

私は、その緊張と恐怖を払拭するため空を見上げる。するとたくさ

んの雲が見える。

フツと思い出すお兄ちゃんに教わった事

リリ、緊張したら空を見るそしたら雲を探せそのあとは…
………自分の悩みと照らし合わせる

そしたら自分がどれだけ小っぱけな悩みに悩んでたか分かるだろ？
？

思い出す優し笑顔で私を撫でる兄の姿、今では帰らぬ人になった。
それでもあのころを思い出では私の心に残っている。

そう思い天国にいる兄に語る。

(そうだよ。お兄ちゃん私の悩みなんてあの雲より小っぱけよね
………ありがとうお兄ちゃんこれで私切り替えられる。)

そう思い空に笑顔を向ける。そしたらお兄ちゃんが笑ったような気がする。

「お！切り替えることができたみたいだな。」

と私待ちなのかアイルさんとフレディーナがこちらを見ながら笑っている。

「すみません。お待たせしました。」

「いい事よ。ここで切り替えて置かないと戦場ではそれが命取りになるからな。」

とこちらに笑いかけてくれる。

「おい……………ミッション説明話まだか??」

ドスの利いた声がへりの和やかな空気を一気に張り詰めさせる。

「こっちは遊びをする為に、ここまで派遣されてきちゃいない!」

アイルさんを睨みながらカズトは言う。

「ハハハ……………わかった。じゃあ説明するは今回お前たち三人に狩ってもらおうアラガミは元アリゾナ州の砂漠に出現したシュウ一体だ。

シュウは火・水などに弱く頭が極めて弱いいわば弱点だ、だがシュウの動きは俊敏である。

んで頭をブレードできるのはお前たち新人には無理がある。そのためフレンディーナの威力のある。

ビューグル砲の弾丸を頭にブチツ込む、怯んだところでリリースとカズトはシュウに一気に攻撃を与える。

だがフレンディーナの弾丸をブチツ込むには、お前ら二人で何とかして隙を作るそれでフレイディーナが決めて成功すれば勝算がグッと上がるかもしれない。

だが注意しろシュウは敵に敏感に反応する。

これはあくまでも奇襲に過ぎないがお前らには取って置ききの作戦だ

がそのためにはお前ら三人のコンビネーションが大切だいな。まあ危なかったら俺が戦闘に参戦するそれだけだ、いいな。

もうすぐ着くから降りる準備をしろよ。」

と言い終わるともう敵地に到着。

降りるとあたり一面砂漠が広がる。湿度はとても蒸し暑く好んでゴツドイーターはここでは戦闘をしない場所でも有名である。

「ここはやっぱりここはいつもながら暑いな……。」

とのん気に鼻歌を歌いながらエリアを進むアイルさんと眠そうに欠伸をするフレディーナ、黙って前を進む進むカズキ、そんな皆を見ながらハラハラしてしまふ。

現在の列はアイルさん、私、フレディーナ、カズト

(本当に大丈夫かな……???)

と思いながら今回のアラガミのことを思い出す。

シユウ 硬い翼手を持つ人型のアラガミ。

人型らしく翼手を用いた武人のような肉弾戦を繰り広げるかと思えば、

掌にエネルギーを集中させて放出するといった攻撃手法もとる。俊敏な動きをとるアラガミ。

そんな事を考えながら歩き進めているウチに町の中に入る回りはたくさんの高層マンションが立ち並んでいたが今では見るも無残な砂漠と一体化したボロボロのビルが立ち並ぶあまりにも悲惨な現場を見て息を飲む私、回りをキョロキョロ眺めるフレディーナ、無関心な態度を取るカズト、そんなことを感じながら歩き進める”ふにや”と声を上げてしまう私なぜかというときなりアイルさんの足が急に止まるものだから思いっきり背中に顔面を当ててしまいビックリしてしまった。

”おお悪い”と言いながらこちらを真剣な顔で見る。

「お前らよく聞けこれから戦闘に入る。前方200m手前に目標のアラガミがいる。これから戦闘のため、陣形を組む前方カズト、後方フレディーナ、遊撃手リリスいいなお前ら絶対に生きて帰ってこい。」

「了解」

私とフレディーナは小声で言い、カズトは無視している。

「あま、気楽にやれやじゃ健闘を祈るぜ」

と言い最後は笑いながら後ろに歩いていく。そんなアイルさんを横目に自分たちの準備をする。

「じゃあ始めますか」

とフレディーナがグツと手袋をきつく締める。ギユと靴ひもを締める私、グツと無言で神機を握りしめるカズト

「行くぞ……」

とカズトの声を口切りにガツと私とカズトが地面を蹴りアラガミに突っ込みフレディーナは建物の中に入り階段を一気に駆け上がる私とカズトはシュウの意標を突き後ろから攻撃を喰えるが、ガツギン、と高い音が響き渡るがシュウの咄嗟の判断で羽を盾に攻撃を受け止める。

「ぐっ、う　　！！」

「きゃあ　　硬！！」

危険を感じて私とカズトはバックステップを踏み距離を取ると目の前に人間のような二足歩行の羽の生えたアラガミが目の前に現れ地面が衝撃波で揺れる。

「これシュウ……」

私は小声でつぶやく。

「グウウウ　　！！」

シュウが鳴き声を上げながら両翼を広げこちら目掛けて突っ込んで来る。カズトと私は左右に飛び攻撃を避ける。

シュウはそのままビル目掛けて飛行を続ける。狙いは

「フレディーナ！！」

と大きな声で名前を叫ぶ私に答えるようにこちらにニッコリと微笑む。

「クツ ……！」

カズトが寸でんで龍大甲を展開させ攻撃を防ぐことができたが反動で体が浮き上がり追い討ちを掛けるかのようにカズトの龍大甲を蹴り飛ばす勢い良くカズトの体が吹き飛ぶ、そのままビルにめり込みそうになる寸前でカズトの体を私が神機を投げ捨てギリギリのところで受け止める。

「…大丈夫??」

と心配そうに聞くと顔を驚かせるが後ろを睨めつけるなり、いきなり

「ボツケとするな!!」

と怒鳴り私のお腹を蹴り横に飛ばすその瞬間、私の居たところにシュウが打ち込んだ爆炎弾が通過する。

「痛った〜。」

私はお腹を押さえながら飛び起き近くに投げ捨てた神機を拾い上げシュウに駆け寄る。

フレディーナがどうにかしてカズトと私からシュウの視線を逸らすことで時間を稼いでくれることができた。

そのまま私の神機をシュウの背中に突き刺し、引き裂く。

「グウウウ

…」

と声がかくぐ漏るシュウ。

(効いてる!!)

このまま一気に押せば勝てると思っていかすと私の連携攻撃みたいな形でシュウを追い込んでいくがシュウもそう簡単には終わらないと言わんばかりに大きく飛躍して三人との距離を取る。

「グオオオオオ

!!!!!!」

と大きく雄叫びを上げるシュウこれによりシュウの体がオーラのような闘気をまとう。

「クツ……………活性化しやがった!!」

とカズトが苦虫を潰した様な苦い顔をする。

私は、そんなのお構いなしにシュウの乱れ撃つ攻撃を最短距離で進み素早いステップでかわしていくそのままシュウの懐に潜り込みシュウの左足を捕食しようとするが俊敏な動きで避けられそうになるが数秒の遅さがシュウにありギリギリ捕食することが成功することによりオラクル細胞が活性化する。

体が黄色いオーラに包まるこれを……………

(バスターモード……………捕食するだけでこんなに力が湧き上がってくる!!)

「カズトくん!!」

と叫びカズトに銃口を向け”受け取って”と引き金を引く

そうすることできさつき捕食したアラガミバレットをカズトに受け渡すことができる。これをリンクバーストと言う。

これによりバーストモードより全体的な能力が向上する。

カズトと私の戦闘能力が格段に上がりシユウが押されていく私が神機を横薙ぎに振り、カズトが真上からクレイモアを叩き落とす、さつきの傷により体に大きなダメージを受けているシユウにとってはこのような攻撃でも命取りなので素早いステップで避け私たちに爆炎弾を放つこれにより距離を一定に取るうとするシユウだがフレディーナによる氷属性のレーザーが背中直撃し怯む。

この好機を逃すことのなく、私が一気に距離を縮め神機できさつき捕食に成功した左足を薙ぎ払うこれによりダメージの受けていた足がグラつきシユウが転ぶ。

「カズトくん!!」

声を張り上げるとこの瞬間を待っていたかのようにシユウの真上にいるカズトはクレイモアをシユウの背中に押し込み、引き裂くこれによりカズトの服が夥しい（おびただ）血で染まるこの攻撃によりシユウが息を絶える。

そのままカズトがプレデターフォームに神機を変化させ捕食する。

「……終了か」

とカズトの声がするなりフレディーナが息を付き地面にぺたんと座

る。わたしは心配になってフレディーナに近寄り顔を眺める。

「大丈夫??」

と顔を覗き込むがこちらに顔を向けないフレディーナ心配になりもつと深く顔を覗き込むとキラキラスマイルで私の胸に飛び込んでくる。

「やった!!やったよ!!リリっち私たちアラガミに勝ったんだよ
!!!」

と言う。

「うん…私たちアラガミに勝ったんだね……………」

と息絶えているシュウを眺めながら呟く私にフレディーナが心配したような顔を見せるので無意識に頭を撫でようと手を伸ばすと……
…パチパチパチと拍手をしながらアイルさんが出てくる。

「お前らよくやった!!初めての实战にしては良くできていたぞ!
ここまでできるとは思わなかったぞ。」

とこちらに笑顔を見せるアイルさんそんなアイルさんにフレディーナが質問を掛ける。

「じゃあさあ私たちの戦いぶりは100満点中何点なの??まあ100点にウグ。」

と言おうとしたフレディーナにニッコリ笑いかけながらアイルさんが人差し指でフレディーナの口を塞ぐ答える。

「まあ、65点くらいかな……」

「65点!?なんでアラガミ倒したしアイルさんの手だって借りてないよ!!!」

と言うがアイルさんがカズト、フレディーナ、私と見た後

「そうだな。まず、-10点分カズトお前は回りが見れていない何回か死ぬかもしれないところがあった。

次の-10点分はフレディーナ全体的に良くできていたが、あまりにもアラガミに近づき過ぎるなブラスタタイプだからと言いつつ射撃速度が遅い点を良く考えておけ!!!」

あとの-10点分はリリースだ今回のミッションはおまえがこの三人の中では比較的良く出来ていたが!!!神機を捨てるなどゴッドイーターとして有るまじき行為だぞ!!!完全な自殺行為だぞ!!!これからは意識をして使えそこら辺に落ちている鉄とは違うんだからないな!!!」

あとは諸々の改善点を引いて-5点分だ。

三人はちゃんと反省いいな!!!」

と声を荒げて怒るアイルさんだが説教が終わると

「だがまあ……ゴッドイーターとしての合格ライン50点を超えたからまあ良しとする。」

じゃあへりを待たせているから早めにへりポートに行くぞ。」

とアイルさんはへりポートに向かい歩き始める。

私たちも少し遅れてアイルさんの後を追う。

「ねえねえリリっちなんで私たちあんなに頑張ったのに65点なんだろう。」

と未だに納得のいかないという顔をするフレディーナ。

「しょうがないよ。これからは、シユウより強いアラガミと戦わなきゃならないから厳しく採点したんだよ。」

と私が言うとフレディーナが口を尖らせる。私は前を歩くカズトにも聞く。

「カズトもそう思うよね。」

と聞いてみると

「……知るか」

と素気ない態度で接するカズトを見て

（あれ??こちらもあの点数にご立腹かな……まあ私もあまりうれしくないけど全体的にバラつきが有ったりもしたからな……まあ少しずつ慣れていけば大丈夫だよね……。）

へりポートに着いてからもそんな事を考えているとフレディーナが

肩を叩く。

「何??」

と振り向くとフレディーナが私の神機に目を向けている。

「ずっと思っていたんだけどリリっちが持つてる神機あまり見ない神機だけど、どうしてなの??」

と聞くフレディーナ。

「ああ、神機??これは クロガネ煽闘零式 アメリカ支部の神機が全然適合できなくて私だけ特別適性試験前に作ってもらったらしいからね…。」

と笑いながら到着したヘリに乗り込む

「「お疲れ様～みなさん」」

と操縦士とクロト博士が笑顔で中から迎え入れる。

「クロト博士!?!」

「お父さん!?!」

「……………」

「おう、クロト博士どうしてこんなところに??」

突然のクロト博士の登場にも落ち着いてアイルさんが疑問を投げか

ける。

「あゝ、リリスちゃんの神機の調子を聞きに来たんだよ。」

「あゝ、そういうことね。」

と一人納得するアイルさん

「で如何だい神機の調子は??」

「変わらず普通です……。」

「そうかね。それは良かった素材をとってきた人はとても喜んで
いるだろうね。」

とアイルさんの顔を横目で眺める。

「え?」

「知らないのかい??君のためにこの神機の素材を適性試験前に集
めてきたのはアイル君率いる第一部隊が集めてくれたんだよ。」

「へえ??」

驚きのあまり変な声が出てしまった。

「本当ですか??」

と私はおどおどしながら聞く。

「あゝ、そうだ。いやゝたつた三日でディアウス・ピター4体、ヘラ2体、ゼウス1体、アマテラス1体を四人で狩つて来たんだからな大事にしるよ。まあそれ相応の報酬も頂けたし文句はないけどな。」

とアイルさんはリリスの頭をクシャクシャに撫でながらクロト博士に笑いかける。

「あれ以上の報酬はもう無理だからね。」

苦笑いの父であるクロト博士をみて笑うフレディーナである。

終始無言でこちらを眺めるカズト。

そんな戦闘の後とは思えない楽しい光景であつた。

ヘリがアナグラに帰る音もかき消す笑い声が響き渡つた。

続く!!

ミッション2 ～初陣～（後書き）

こんにちは、本間マグロです。

今回は、シウウとの戦闘を書きましたがどうでしたか。
変な点がありましたら誠にスイマセン。

私は、最近バイトをし始めました。

イベントのある時に呼ばれるある意味雇われお祭り男みたいなものです（笑）

今現在は魚を詰めているなどをしてあまりバイトにイベントに参加できません。

そんなこんなで楽しい人生を過ごしています。

今度小説はキャラ説明になります。

興味がある人は見てください。

今回小説を読んでくれた方々に感謝して今回はここまでにしたいと思います。

今度の小説は1月4日になると思います。

それではまた会いましょう。（＾v＾）／＼

G O D E A T E R キャラ説明(前書き)

今回

G O D E A T E R T H E W O R L D S H I N E a P E
R S O N S ・世界を照らす者たち・
のキャラ説明です

GOD EATER キャラ説明

・名前：リリス＝プレーナ

・新型神機：

クログガネ煽鬨零式（ロングブレード）／神フクインシールド／
帝王剛神砲（アサルト）

・性別：女

・年齢：17歳

・身長：168？

・体重：50Kg

・スリーサイズ：78 58 80

・家族構成：父、母、兄、妹、犬

・一人称：私

・趣味：読書 日々の鍛練 （アイルさんなど）

・特技：聞き流し

・大切なもの：仲間、優しさ、力

・苦手なもの：口うるさい人、虫

・尊敬する人：兄

・配属部隊：第7部隊

・キャラクター説明

アメリカ支部所属のゴッドイーター戦闘能力はピカ一だが神機の
使い慣れておれず動きがおぼつかないところがある。

クロト博士から一目置かれている一人今回の様な専用神機を作った
のが初めてだった為興味を持たれたということである。

出身地は元ニューヨーク州に住む住人だったが、ある事件で大切なアラガミ用の防壁が粉碎。この時にアラガミの大群が押し寄せてくる。これにより3万人もの住人と家屋までもが壊滅状態まで追い込まれる。

この時ある新種のアラガミにより目の前で家族を喰われたとされる。数分後にゴツドイターが到着するモノの村は酷いありさまだったと資料に記入されていた。

その際ゴツドイターが少女を見つけているこれによりリリースが保護される。

その後ゴツドイターたちの頑張りにより7年掛けて元の状態まで戻すことに成功している。

性格はとても内気だが心の中で激しいツツコミを咬ますこともある。仲間のこと大事にするそのため人一倍仲間を大切にするあまりに仲間を庇うなどして大怪我をしそうにもなる。

今現在の力は未知数である。

特徴は紅く染まった長い髪、ロングヘア、炎のように燃える瞳、黒色に統一された上下の服。黒いマント。

まさに「^{ヘルカイザー}死神」と連想させる。少女!!

アメリカ支部の新型神機使いとして《25人目》

・名前：フレディーナワグナー

・旧型銃系神機：ビューグル砲

・性別：女

・年齢：17歳

・身長：158?

・体重：43Kg

・スリーサイズ：88 59 83

・家族構成：父母

・一人称：私

・趣味：あだ名をつける

・特技：誰にでもフレンドシップ

・大切なもの：家族 仲間 リリス

・苦手なもの：アレックス支部長

・尊敬する人：烏枝^{うえだ} マサヒロ

・配属部隊：第7部隊

・キャラクター説明

アメリカ支部所属のゴッドイーター現在のアメリカ支部には数の多い旧型神機使いの一人。

だが数少ないブラスト系神機の使い手でもある。

クロト博士の娘でありアラガミのことをゴッドイーターの中で一番知識がある。

リリスなどのあだ名を考えることが趣味でありある意味で生きがい。父親に育てられてきたことにより性格も明るく元気な人間だが小さいときに母親を亡くしてしまっている。

回りにはできるだけ心配を掛けたくないので時々カラ元気 みんなを心配させたりすることもある。

服装はゴスロリの上着にふわふわなミニスカートである。

髪型は栗色のボブカットで体系は小柄なのだがそれに似合わない豊かな胸が特徴的である。

・名前：討神^{とうがみ} カスト

・新型神機：肉斬りクレイモア / 龍大甲 / 20型ガット

・性別：男

・年齢：18歳

・身長：178?

・体重：71Kg

・家族構成：父 母 弟

- ・ 一人称…俺
- ・ 趣味…空を眺めること 音楽鑑賞
- ・ 特技…なし
- ・ 大切なもの…仲間 (たぶん…)
- ・ 苦手なもの…ゴッドイーター全体
- ・ 尊敬する人…極東支部のゴッドイーター
- ・ 配属部隊…第7部隊

・ キャラクター説明

元極東支部のゴッドイーター育成機関に配属された人間【ナンバー007】人工人間とは言わない。

元々は外部住民だった彼が家族の命を守るために志願して入ったのだが今現在はアメリカ支部に配属されている。

小さいころは元気で誰にでも愛される少年だったがアラガミを知り親友たちを喰い殺されたりして昔のような優しさが無くなってしまっている。

そのせいでいつも無愛想であり良い印象を仲間に見せない。

とても馴れ合いを嫌っているが時には仲間を助けるなど不器用ながら仲間を助けてくる面もある。

特に配属部隊の仲間には少しずつ優しくなる予定…たぶん。

黒髪に整った顔立ち、黒い瞳、服装は青色と灰色が主体の上着と黒いズボンを履いている。

アメリカ支部の新形神機使いの《20人目》である。

・名前：アイル「イーガー」

・新型神機： 虎剣 大王 真ノ強支援シールドノヤタガラス 改

・性別：男

・年齢：21歳

・身長：183?

・体重：75Kg

・家族構成：叔父 叔母 父母 姉 妹

・一人称：俺

・趣味：寝る！！

・特技：料理

・大切なもの：仲間、優しさ、

・苦手なもの：姉、妹

・尊敬する人：ニイル「ウォルド」

・配属部隊：第1部隊（隊長）

キャラクター説明

あまりにもオチャラケている現在アメリカ支部最強のゴッドイーターでもある。

いつも寝ることだけ考えているのでいつも姉や妹たちに怒られている。

元々ゴッドイーターに成る気には更々なかったがある事情によりゴッドイーターになっている。

いつも仲間を気にしているためミッションに出ると必ず大怪我をするが頑丈なため半日で治ってしまう。

今現在も謎が多い人物…。

髪はオレンジ色、スツと通った鼻筋、凜々しい顔立ちに体格の良い。

オレンジ色のジャンパーの中に緑色のインナー、ズボンは赤黒いズボンを穿いている。

アメリカ支部の新形神機使いの《10人目》である。

続く!!

G O D E A T E R キャラ説明（後書き）

皆さんこんにちには本間マグロです。

今回はキャラクター説明を書きましたがどうでしたでしょうか？
分かりましたでしょうか？

分かっていただけだと信じて次回の予告です。

今回はアイル不在のミッションです。

そのためある旧型神機使いの男が登場します。

そして気になるミッションはオウガテイル墮天7体と戦います。

そしてこの任務であるイレギュラー起こる果たして何が起こるか
次回をお楽しみに（笑）

それでは今回見てくれました読者の方に感謝してこれを閉じさせて
もらいます。

次の配信はたぶん……1月20日までには配信するおつもりですそ
れではみなさんさようなら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7258z/>

GOD EATER THE WORLD SHINE a PERSONS - 世界を照らす者たち -

2012年1月9日02時45分発行